
ゆるゆり ～Enjoy Story～

探偵コアラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆるゆり ～Enjoy Story～

【Nコード】

N8213W

【作者名】

探偵コアラ

【あらすじ】

西暦X年、とある町に存在する「七森中学校」を舞台に繰り広げられる謎に満ちた学校生活・・・、果たして彼女たちは己の壁を超えることができるのか・・・

なんてことはありません（笑）コンセプトである「暇な時間で少し笑える」を大切に、いつも通りのゆる～い学校生活が・・・

アカリ「はっじまるよー」↑アニメで一番最初にやりますよね（笑）

※この小説は基本的に会話です。なので台本のようになっています

※1話あたり約1000文字を目標にしています

※略称はゆるゆりESです
※お暇な時のお共にどうぞ

第0話 ゆる〜いキャラ紹介

赤座あかり

七森中学校に通う中学1年生の女の子。原作「ゆるゆり」では主人公・・・ではあるのだがはっきり言って「影が薄い」。

性格はいい子、ホントいい子。だから特徴がなく空気となるんです、はい。

頭に髪でお団子を作っており「クマ」に間違われたりお団子を投げて攻撃する「お団子バズーカ」など彼女のある意味唯一の特徴・・・といえるのか？

京子や結衣とは幼なじみで仲良しであり敬語は使わない

歳納京子

七森中学校に通う中学2年生の女の子。にぎやかでありよく言えば周りを引っ張っていく存在、悪くいえば自己中である。

その特徴からよく目立ち、1人の主人公のような感じもするが主人公ではない・・・多分。

成績は一夜漬けで学年1位をとるほど、コアラからすれば凄くうらやましいッス。

食べ物はラムレーズンというアイスが大好物でお昼ご飯をラムレーズンですまそうとしたこともある。

また大のオタクで「魔女っ娘ミラクるん」という作品が大好き、自分で同人活動として漫画を書くほどである。

結衣やあかりとは幼なじみで仲良し。

船見結衣

七森中学校に通う中学2年生の女の子。物静かな性格だが京子達へのつつこみをしているうちにつっこみ役になっていくらしい。

1人暮らしをしており京子達を呼ぶこともある。

一見強そうな性格だが実はさびしがり屋、だからこそ京子とはうまくやっていけているのかも知れない。

また男言葉であり女言葉を使うのは少々苦手、恥ずかしいようである。

アカリや京子とは幼なじみで仲良し。

吉川ちなつ

七森中学校に通う中学1年生の女の子。見た目が京子の好きなアニメ「魔女っ娘ミラクるん」の主人公に似ていることから半強制的に入部させられた。元々は茶道部志望。

京子におそわれた際に結衣が助けてくれたことをきっかけに結衣のことを好きになりひたすら片思い中。いわゆる本当の「百合」である。

愛くるしいその見た目とは裏腹に実は腹黒いという噂もある。

また絵などの芸術に関しては絶望的で（本人は気づかずむしろ才能があると思ってる）あかりの場合、その絵で白目をむいて気絶したことがある。

第1話 あかり「はっじまるよー！」

あかり「こんにちわ、私アカリ、赤座アカリっています。本作「ゆるゆり」の主人こ・・・」

京子「みんなー、なんかしようぜ！」

あかり「っていきなり!？」

京子「だって自己紹介なら前の回でコアラがしてるじゃん」

あかり「そ、それはそうだけど・・・」

京子「ってことでなんかしよう!!」

結衣「なんかってなんだ、なんかって。別にすることもないだろ?」

京子「うーん・・・じゃあこんなの?」

『水着お披露目会』

結衣「季節の設定を考えろ、設定を！！」

※現在春の設定です

京子「そう言えばさ、これって小説なんだから絵がないよね？絵が

ないと楽しくない?」

ちなつ「ああ、それは言っちゃダメです先輩! コアラさんが書く際に一番問題視してたことを暴露しちゃダメです!!」

結衣「ちなつちゃんも暴露してるけどね・・・」

京子「それにさ、この文面白くないよね?」

あかり「ああ、それは・・・」

結衣「コアラが2番目に問題視してたことを暴露しちゃダメだろ!」

京子「そっかぁ・・・でもどうするの? 面白くない文を書いて・・・もうこの小説終わらせる?」

あかり「早速終了!?」

結衣「もしくは短編・・・とか?」

ちなつ「でもコアラさん短編は書かないって言ってましたよ?」

京子「ということはまだ続くのか、この小説・・・」

あかり「・・・」

ちなつ「・・・」

結衣「・・・って暗い雰囲気になるのはやめよう！明らかに明るい話じゃない！」

あかり「そうだね。じゃあこの小説でどういう活躍したいかみんなで言おうよ」

京子「お、いいね」

ちなつ「賛成です！じゃあ私から！・・・結衣先輩と・・・ラブラブしたいです！」

京子「あ、それ却下ね。今コアラが打ち間違いで「ラブラブ死体」って書いたから」

ちなつ「ええー！」

結衣「どう考えてもおかしいだろ、っていうかちなつちゃんのも妙におかしいような・・・」

京子「結衣は？なんかないの？」

結衣「私？私はそうだなあ・・・みんなで仲良くできればそれで良いかな」

ちなつ「結衣先輩、やさしいです」

結衣「あ、ありがとう」

京子「面白くないなあ」

結衣「じゃあ京子は何かあるの？」

京子「ちなつちゃんとキ○したい!!」

結衣「15禁になるからやめろ、確かにゆるりってタイトルだけ

ど」

京子「・・・じゃあラムレーズンたくさん食いたい!!」

結衣「・・・」

京子「・・・」

結衣「・・・」

京子「・・・なんかつつこんでよ!!」

結衣「つつこみも疲れた」

京子「ブー。・・・そういえばあかり、あかりは何かあるの?」

あかり「えっ? あかり? あかりはね・・・」

あかり「あと少し出番がほしい」

結衣「切実だ・・・」

ちなつ「今回もタイトル飾ったのに出番が少ないですからね・・・」

京子「ってことでゆるゆり、まだまだ続くよ!!」

あかり「それは主人公のあかりのセリフ」

結衣&ちなつ「あかり（ちゃん）、不憫な子・・・」

第2話 京子「バナナはおやつにはいりますか？」

京子「さあ諸君！行こう！！」

結衣「いきなり言われても分からん」

あかり「結衣ちゃんいきなりつつこむね」

結衣「だって私らしか話さないんだよ？この小説。途中がないの」

あかり「あゝ、「ゝなゝした。ゝは思った」みたいなの？」

結衣「そう、だから会話だけで話を進めなきゃいけないんだ。躊躇してたら小説じゃなくなるだろう？」

あかり「この時点で小説じゃないような・・・」

ちなつ「それで、どこにいくんですか？」

京子「フッフ、よくぞ聞いた諸君。どうしても、どうしても聞きたいか！？」

結衣「別に」

京子「え？」

ちなつ「どうしてもってわけじゃないです」

京子「あゝもう、そこは聞かないと話進まないでしょ？ 全く、みんな分かってないなあ」

あかり「私まだ聞かれてないよ！？」

京子「じゃあもう一回聞くよ？ 知りたいか！？」

結衣「わー知りたい知りたい」 ↑ 棒読み

ちなつ「わー私も知りたいです、先輩教えてください」 ↑ 棒読み

京子「そう簡単に教えると思ったか！！」

結衣「めんどくさいな・・・」

ちなつ「どうしたらおしえてくれるんですか？」↑棒読み

京子「己の心に聞いてみろ!!」(´|`、)

結衣「めんどくさいから止めろ、あとドヤ顔するな」

京子「やゝん、結衣お姉さまったら・・・」

結衣「かなづちとハンマーどっちがいい？選ばせてあげるよ」

京子「すいませんでした」

結衣「んで、どこに行くんだよ？」

京子「それは己の心に・・・」

結衣「・・・」↑ハンマースタンバイ

京子「ごめんごめんごめん、遠足だよ、遠足」

結衣「遠足？」

京子「そう！ENSOKU！」

ちなつ「そう言えば学校行事のプリントに載ってましたね。いつでしたっけ？」

京子「明日だよ明日！だからみんなで偵察に行こうと思ったわけだ！！」

結衣「偵察って遠足だろ？別にそんなことしなくても・・・」

京子「ダメダメ、そう言う油断が仲間の犠牲を生むんだ！」

結衣「とりあえずお前はゲームのしすぎな」

ちなつ「でも見に行ってどうするんですか？」

京子「えっ？」

結衣「そうだ、行った方がいいがそれからどうするんだ？」

京子「フッフ、それはね・・・」

ちなつ「それは・・・？」

京子「それは・・・」

結衣「それは・・・？」

京子「知らない」

ちなつ「やっぱり・・・」

結衣「予想通りの答えだな」

第3話 結衣「今日は雨か・・・」

京子「んゝ・・・・・・・・ひまぁ!!」

結衣「しょうがないだろ、そんなこと言っただけ」

ちなつ「外が雨ですもんね」

京子「でもさ、私らいつも外で何かしてるわけじゃないじゃん、関係なくない？」

結衣「それはそうだけど・・・」

京子「いや、雨だからこそ外へ・・・」

結衣「・・・お前はバカか？」

京子「バカとと天才はあ・・・紙一重!!」

結衣「・・・」

京子「・・・」

結衣「・・・」

京子「・・・何かコメントちょうだい! ねえ!!」

結衣「いやお前の相手するのも疲れるからさ」

京子「そんなこと言わないでえ・・・ねえちなつちゃ・・・」

ちなつ「結衣センパ〜イ♪」

京子「ヌアア!? ゆ、結衣! 私のちなつちゃん取るな!」

結衣「取るな? 別にとってないけど・・・」

京子「私にも分ける!!」

結衣「いや無理だろ!」

ちなつ「そんな結衣先輩・・・私を護る為に・・・」

結衣「いや、別にそういうわけじゃないんだけど・・・」

京子「仕方ない、それじゃあちなつちゃんに決めてもら・・・」

ちなつ「結衣先輩がいいです」

京子「・・・うんじゃなくて・・・」

ちなつ「言い変えた!?!」

京子「勝負だ!」

結衣「何故そうなる」

京子「知らないのか? 古来より、男達は何かをかけて己の体と体でぶつかり合い・・・」

結衣「私女だし」

京子「・・・・・・・・じゃ、じゃあ古来より女達は・・・・」

結衣「言い換えるな、それに勝負って何をするんだ？」

京子「えっ、それは・・・・」

結衣「それは？」

京子「・・・・ラ、ラムレーズンの早食い！」

結衣「お前はアホか」

京子「だってラムレーズン食べたいじゃん。雨だからこそその旨味が・・・・」

結衣「ねーよ。それに勝負が抜けてるし」

京子「あれ？」

結衣「どうした？」

京子「なんで勝負するんだっけ？」

結衣「・・・・」

京子「・・・・」

結衣「地球の平和を護る為」

京子「おお、そうだった!!」

ちなつ「ええ、信じちゃった!?!」

結衣「では京子隊員、地球の平和を護る為グランドを10周してきて」

京子「まかせろ!地球の平和は私が護ってやるぜ!!」

ちなつ「あ、行っちゃった・・・」

京子「さて、静かになったね」

ちなつ「そうですね・・・あれ?」

結衣「ん?どうかした?」

ちなつ「いえ・・・何か忘れてるような・・・」

結衣「何か?」

ちなつ「あ、気にしないで下さい。それより先輩、お茶いれましょうか?」

結衣「あ、じゃあお願いしてもいい?」

ちなつ「はい!!!頑張って入れますよ!!!」

あかり「ねえ、この小説の主人公ってあかりだよね！？あかりなんだよね！？出番がとっても少ないんだけど！！ねえ、ちょ、私が主人公だよねえ！？」

第4話　ちなつ「遠足ってなんで遠い足なのかな？」

京子「わーい、遠足だあ」

結衣「はしゃぐな、1年せいかな！」

京子「だって遠足だぞ、遠足！遠くの足だぜ？」

結衣「意味わからん」

京子「それより結衣君、何かを忘れてはござらんか？」

結衣「何か？何かって・・・なに？」

京子「お菓子だよ、お菓子！！」

結衣「あゝお菓子か。まあいくつかは・・・」

京子「見せろ」

結衣「え、いいけど・・・」

京子「わ！ポテチだ！！」

結衣「ああ、それ後からみんなで・・・」

京子「そうだね（パリパリ）、みんなで（パリパリ）食べると（パリパリ）よりいっそう（パリパリ）おいしいね（パリパリ）・・・」

結衣「って食ってるし!!」

京子「え? おお!! (パリパリ) いつの間にか食べてた! (パリパリ) これはもう (パリパリ) 全部食べるしか (パリパリ) ないね (パリパリ)」

結衣「まだ食ってるし!」

京子「しょうがない、説明しよう。人間の体には必ず塩分が必要である。そう、塩分は必要不可欠なのだ。このポテチにはその重要な塩分が豊富に含まれている。しかも現代人が食べやすいように作っており、匂いなどから興味を引く。さらに1枚1枚を食す瞬間のーパリッーという音がなおのこと食欲をそそる。そのことにより脳内の・・・」

結衣「変な言い訳はいいから素直にごめんなさいしろ」

京子「アイムソーリー、ごめんなさい」

結衣「ったく・・・まあそれは全部食べてもいいよ」

京子「ホント!?!」

結衣「こんなことに嘘つくと思う?」

京子「ははー!! ありがとうございます、結衣お嬢様!! この恩は一生忘れませぬ!!」

結衣「・・・そう思うんなら大勢の人の前で土下座するのをやめて

くれるかな・・・」

あかり「えへへ、今日は遠足だね!」

ちなつ「あゝあ、結衣先輩と行きたかったなあ」

あかり「あはは、しょうがないよ、結衣ちゃん達は2年生で私達は1年生なんだから」

ちなつ「なんで私はあかりちゃんと・・・?」

あかり「あれれ?今何かいけないことを聞いちゃったような気がするなあ・・・あはは・・・」

ちなつ「ところであかりちゃん?」

あかり「何?ちなつちゃん?」

ちなつ「なんで頭に鳥飼ってるの?」

あかり「ええ!?あかりそんな鳥さんなんて飼ってな・・・ってホントにいる!?!」

ちなつ「でしょ?」

あかり「うん、見事にあかりの頭のお団子のところにいるよお」

ちなつ「あ、他の鳥が木の枝を運んできた」

あかり「ええ！？ここ巣にしちゃうの！？ここはもう鳥さんのおうちなの！？」

ちなつ「あかりちゃん」

あかり「え？もしかしてちなつちゃん、助けて・・・」

ちなつ「諦めも肝心だよ！」

あかり「見捨てるのお！？そこで見捨てちゃうの！？」

ちなつ「だってほら、チュンチュン言ってる嬉しそうだし」

あかり「あかりの頭ってそんなに巣として良い場所なの！？」

ちなつ「これで影も濃くなるかも・・・だよ！」

あかり「・・・それはそれで良いかも・・・」

ちなつ「いいの！？」

第5話 綾乃「これを見ないなんて・・・罰金バッキングガムよ!!」

綾乃「歳納京子ー!!」

京子「ん？あ、綾乃じゃん」

綾乃「綾乃じゃん、じゃないわよ!!なんでこの小説が連載スタートだということを知らせてないのよ!!」

京子「ああ、それ。ちゃんと理由があるんだけど」

綾乃「り、理由?・・・何よ、行ってみないさいよ」

京子「それはね・・・忘れてた」

綾乃「・・・え?」

京子「だから、私が綾乃に伝えるのを忘れたんだってば」

綾乃「ちよつと、それが理由なの!？」

京子「うん♪」

綾乃「うん♪じゃないわよ!!おかげでプロフィールすら載せられてないじゃない!」

京子「あゝ、それなら今からすれば?」

綾乃「い、今って・・・ここで!？」

京子「もちろん」

綾乃「ちょっと、それって・・・」

京子「あれあれ、綾乃さん、もしかして・・・自信ないの？」

綾乃「なっ!」

京子「副生徒会長ともあろうお方が・・・」

綾乃「で、できるわよ! ちよ、ちよとびっくりしただけでやろうと思えば出来るわ!」

京子「お、流石! それじゃあ自己紹介スタート!」

綾乃「っていきなり!?! ええっと・・・私は杉浦綾乃、この七森中学校の2年生で副生徒会長として生徒会活動をしています。これからよろしくお願い・・・」

京子「ジーー」

綾乃「な、何よ・・・?」

京子「それだけ?」

綾乃「えっ?」

京子「綾乃の自己紹介ってそんだけなの？」

綾乃「なっ・・・これじゃダメなの？」

京子「もっとうこう・・・3サイズとかさ」

綾乃「ちよっと、この小説をそんなイヤラシイ小説にする気！？第一あなただって・・・ほら、そんなの公表されてないじゃない」

京子「いや、ほら、私のは・・・読者のみんなの想像で・・・ネ☆」

綾乃「ネ☆じゃないわよ！そんなのダメよダメ。この小説は純粹な面白さだけを・・・」

京子「それじゃあさ、綾乃の個性ってないの？」

綾乃「個性・・・ね・・・」

京子「・・・もしかしてあかりと同じで影薄いタイプ・・・？」

綾乃「ち、違うわよ！あるわよ、個性・・・でしょ？」

京子「おお！して、それは！？」

綾乃「えっと・・・」

京子「うんうん」

綾乃「その・・・」

京子「うんうん♪」

綾乃「・・・そうよ、副生徒会長として悪いことをした生徒に罰金
バツキングラムすることよ!!」

京子「・・・」

綾乃「な、なによ・・・」

京子「要するに、おやじギャグキャラ・・・ってこと?」

綾乃「見るとこそこじゃなーーーい!!」

第6話 千歳「ここは・・・天国やぁ・・・」

京子「ってことで今回は倶楽部に千歳が遊びにきてくれたぞー!」

千歳「初めまして、千歳です」

京子「ちなみに千歳は京都弁で・・・」

綾乃「関西弁よ、関西弁!」

千歳「あ、綾乃ちゃん。ちなみに、綾乃ちゃんと同じで生徒会やで」

京子「あ、生徒会といえば綾乃く、プリンちょうだい」

綾乃「な、何いつてるのよ! あ、あれは私の何だから!」

千歳「ちなみに、歳納さんはいつも綾乃ちゃんのプリンを狙っとるんや。綾乃ちゃんはいつも生徒会室の冷蔵庫にプリン入れとるからやね」

京子「いいじゃん、ケチく・・・じゃあ「あくん」してあげるから」

千歳「なっ!? (スチャツ)」

綾乃「なっ!? (そして千歳が眼鏡を取った!!)」

京子「私が1口だけ綾乃にあくんしてあげるからさ、残りをちょう

だい」

綾乃「な、な、何いつてるのよ！そ、そんなあゝんだなんて……
って千歳！？」

千歳「あゝ……ええなあゝ」

綾乃「千歳ー！？」

千歳「説明しよう、うちは主に綾乃ちゃんと歳納さんの会話を聞いて眼鏡を外して妄想をし、その妄想によって鼻血がでてしまうのだ
！！」

綾乃「だ！！じゃないわよ、ちょっと大丈夫！？」

京子「綾乃さあゝん、もっどこっちへ……」

千歳「ブハッ」

綾乃「きゃー、千歳ー！やめなさいよ歳納京子！！」

京子「出したいものは……出させるべきだと思う（キリッ）」

綾乃「そこでカッコつけても何にもならないわよ！」

千歳「楽しかった日々……ありがとう」

綾乃「きゃー！千歳ー！！」

京子「そして数分後」

綾乃「案外早いね・・・」

京子「小説上の都合だからな」

千歳「はあく久々にいい鼻血やったわ」

綾乃「いい鼻血って・・・」

京子「もう一度・・・出してみる？」

千歳「!？」

綾乃「歳納京子はこれ以上言わない!そして千歳も眼鏡を外さない!!」

京子「ちえー」

綾乃「いいのかしら?この娯楽部部室である茶道部室が鼻血だらけになっても・・・?」

京子「結衣に叱られるんでやめてください」

綾乃「でしょ？」

千歳「でもな、綾乃ちゃん。うち、思うねん」

綾乃「何をよ？」

千歳「鼻血って言うのはな、体の血流をよくするための大切な行いだと思うんよ。それに・・・」

京子「それに・・・？」

千歳「妄想をして鼻血を出すこと・・・それがうちの生き甲斐やからな（キリッ）」

京子「さっすが千歳！」

千歳「これからも・・・出しでくで!!」

綾乃「出さなくていいんイングランドよ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213w/>

ゆるゆり ～Enjoy Story～

2011年11月13日00時49分発行